

V 考 察

1 条坊の復元

今回の報告対象である左京三条一坊十四坪は、東が東一坊大路、西が東一坊坊間東小路に面し、北を三条条間路、南を三条条間南小路によって画される。これらの道路については、いずれも過去に発掘調査を行っているので、その成果に基づき、当該坪四周の条坊を復元しておこう。

作業にあたっては、データの解析と統計的な処理を容易にするために、各条坊道路の路心や側溝心を、 $X \cdot Y$ の一次関数で表すことにする。そして、三箇所以上の遺構データが存在するものについては、回帰分析により、直線の傾きと切片の最確値を計算する方式を採用した。ただし、データが二箇所でしか得られていない場合は、たんにそれぞれを結ぶ直線を求めるものとする。計算の結果は、Tab.11に示すとおりである。

令大尺と令小尺 記述を進めるにあたり、まず尺度について整理しておきたい。奈良時代の尺度には、大宝令に定める大尺と小尺の二種類があり、平城京の条坊の設定は、基本的に令大尺を用いて行われている⁽¹⁾。令小尺は、1尺＝約0.30mの唐大尺、令大尺はその1.2倍の、いわゆる高麗尺とみるのが通説であり、本書もその立場をとる。ところが、一方で、令大尺＝唐大尺とし、令小尺を、1尺＝約0.25mの唐小尺とみる説も、古くから存在する。さらに近年では、高麗尺そのものを否定する見解も提示されるにいたった⁽²⁾。しかし、以下の理由から、少なくとも令大尺・令小尺が、それぞれ唐大尺・唐小尺に対応するという考えは、成り立たないと思う。

大宝令の雑令には、「一尺二寸を、大尺の一尺と為よ」「凡そ地度り、銀、銅、穀量らむは、皆大を用るよ。此の外は、官私悉くに小なる者を用るよ」「凡そ地度らむことは、五尺を歩と為よ」の規定がある。これは和銅六年（713）二月十九日に改定され（『続日本紀』和銅六年二月壬子条）、令集解田令田長条に引く同日の格では、「其地を度るに六尺を以て歩と為よ」と規定された。つまり、和銅六年のこの時点で、従前の度地尺としての令大尺の使用が廃され、度地尺を含めて、全てが令小尺に統一されたわけである。

一方、平城宮・平城京などの奈良時代の現存建築や発掘遺構をみると、唐小尺が使用された形跡はなく、いずれも、いわゆる天平尺である唐大尺を用いている。また、条坊や地割など、度地にかかわる部分では、奈良時代当初は、唐大尺の1.2倍にあたる尺度（いわゆる高麗尺）か、またはその5倍（唐大尺の6倍）にあたる「歩」を使用し、以後、唐大尺そのものが使われたことがわかっている。これは、上記の大宝令の規定やその改定状況とよく対応するものであり、それらが空文ではなく、実際に遵守されたことは疑いない。同時に、令小尺＝唐大尺とみて、はじめて理解できるものである。

つまり、令大尺が度地尺として短期間使用されたのを除けば、奈良時代に普遍的に用いられたのは令小尺であるが、それが唐大尺であったことは明白である。令小尺＝唐小尺とみるためには、大宝令や和銅六年の格の実効性を完全に否定し、令大尺が全てにわたって用いられたと認定しうるだけの根拠を明示するか、建築をはじめとする奈良時代の遺構に関して、唐小尺の使用を立証しなければならない。和銅六年の度量衡改定がなぜ行われたのか、という点についても、明快な説明が必要である。当該時期の遺構についての資料の蓄積と研究が進行した現在にあっては、不可能と言わざるをえないであろう。以下では、令小尺＝唐大尺として記述する。

Tab.10 関連条坊座標一覧表

点	条 坊 種 別	X座標	Y座標	調査次数	文献	座標値の典拠
1	東一坊大路 東側溝心	-145,763.24	-18,043.13	奈文研 39次	a	文献 p.88
2	東一坊大路 東側溝心	-146,039.54	-18,041.48	奈文研 32次	b	文献 p.88
3	東一坊大路 東側溝心	-148,177.50	-18,030.50	奈文研 252次		実測図
4	東一坊大路 道路心	-145,729.60	-18,054.90	奈文研 39次	a	文献 q p.66
5	東一坊大路 道路心	-145,754.77	-18,054.91	奈文研 39次	a	実測図
6	東一坊大路 道路心	-146,030.42	-18,053.43	奈文研 32次	b	実測図
7	東一坊大路 道路心	-148,177.30	-18,041.65	奈文研 252次		実測図
8	東一坊大路 西側溝心	-145,746.29	-18,066.69	奈文研 39次	a	実測図
9	東一坊大路 西側溝心	-146,021.29	-18,065.37	奈文研 32次	b	実測図
10	東一坊大路 西側溝心	-146,122.00	-18,064.45	奈文研 234-9次	c	実測図
11	東一坊大路 西側溝心	-146,208.00	-18,064.00	奈文研 118-8次	d	文献 r p.195
12	東一坊大路 西側溝心	-148,177.10	-18,052.80	奈文研 252次		実測図
13	東一坊坊間東小路 東側溝心	-146,215.00	-18,182.35	奈文研 230次	e	文献 e p.65
14	東一坊坊間東小路 東側溝心	-146,342.00	-18,182.00	奈文研 46次	本書	実測図
15	東一坊坊間東小路 東側溝心	-147,795.00	-18,175.88	奈良市 139次	f	文献 f p.49
16	東一坊坊間東小路 道路心	-146,215.00	-18,185.88	奈文研 230次	e	文献 e p.65
17	東一坊坊間東小路 道路心	-147,795.00	-18,179.11	奈良市 139次	f	文献 g p.49
18	東一坊坊間東小路 西側溝心	-146,096.00	-18,190.20	奈文研 242-9次	g	文献 g p.74
19	東一坊坊間東小路 西側溝心	-146,215.00	-18,189.40	奈文研 230次	e	文献 e p.65
20	東一坊坊間東小路 西側溝心	-147,795.00	-18,182.35	奈良市 139次	f	文献 f p.49
21	三条条間路 北側溝心	-146,283.43	-19,740.00	奈良市 196-4次	h	文献 h p.17
22	三条条間路 道路心	-146,287.84	-19,745.35	奈良市 236-2次	i	文献 i p.6
23	三条条間路 南側溝心	-146,292.25	-19,750.70	奈良市 236-2次	i	文献 i p.6より
24	三条条間南小路 北側溝心	-146,413.33	-17,991.40	奈文研 174-10次	j	実測図
25	三条条間南小路 北側溝心	-146,410.25	-19,837.00	奈文研 162次	k	実測図
26	三条条間南小路 道路心	-146,416.88	-17,991.40	奈文研 174-10次	j	文献 j p.60
27	三条条間南小路 道路心	-146,415.30	-19,837.00	奈文研 162次	k	実測図
28	三条条間南小路 南側溝心	-146,416.10	-16,370.00	奈良市 84次	l	文献 n p.51
29	三条条間南小路 南側溝心	-146,416.13	-16,430.00	奈良市 54次	m	文献 s p.127
30	三条条間南小路 南側溝心	-146,417.05	-16,626.20	榎考研 985061	n	文献 n p.51
31	三条条間南小路 南側溝心	-146,417.92	-16,879.00	奈文研 151-18次	o	文献 s p.127
32	三条条間南小路 南側溝心	-146,420.43	-17,991.40	奈文研 174-10次	j	文献 n p.51
33	三条条間南小路 南側溝心	-146,420.35	-19,837.00	奈文研 162次	k	実測図

文 献

- a 猪熊兼勝・森郁夫「第39次調査 東面南門推定地東側」『奈良国立文化財研究所年報1967』1967年 pp.42-45
- b 石井則孝・三輪嘉六「第32次調査 宮城東南隅」『奈良国立文化財研究所年報1966』1966年 pp.36-39
- c 杉山洋「東一坊大路西側溝の調査 第234-9次」『1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1993年 p.73
- d 井上和人「左京三条一坊十五坪の調査（第118-8次）」『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1980年 pp.25-26
- e 小野健吉「左京三条一坊十・十五・十六坪の調査 第230次」『1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1993年 pp.57-66
- f 鐘方正樹「平城京左京六条一坊十・十五坪坪境小路の調査 第139次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度』1988年 p.49
- g 小池伸彦「左京三条一坊九・十六坪（境）の調査 第242-9次」『1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1994年 p.74
- h 中井公・川越邦江「平城京右京三条三坊二坪の調査 第196-4・5次、第213-4次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』1991年 pp.17-18
- i 秋山成人・池田裕英ほか「平城京右京三条三坊三坪・菅原東遺跡の調査 第236・236-2次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』1993年 pp.4-15
- j 小林謙一「左京三条二坊三・四坪の調査 第174-10次」『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1987年 pp.58-60
- k 西弘海「右京三条三坊四・五・六坪の調査 第162次」『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1985年 pp.63-64
- l 西崎卓哉「平城京左京(外京)三条五坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』1985年 pp.93-94
- m 中井公・森下恵介ほか「平城京左京三条五坊四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984年 pp.23-27
- n 奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京三条四坊十二坪発掘調査報告」1987年
- o 橋本義則「左京三条四坊四坪の調査 第151-18次」『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1984年 p.43
- p 小沢毅「左京三条二坊四坪の調査 第215-16次」『1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1991年 pp.81-91
- q 小沢毅「平城宮小子門の再検討」『奈良国立文化財研究所年報1994』1994年 pp.66-67
- r 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所三十年史』1982年
- s 西崎卓哉「平城京左京三条四坊十坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』1985年 pp.124-128

Tab.11 条坊遺構の関数化

条 坊 遺 構	方 程 式	相関係数	標準誤差	観測数
東一坊大路 東側溝心	$Y = -0.0051951X - 18800.28$	0.99988	0.153	3
東一坊大路 道路心	$Y = -0.0054517X - 18849.48$	0.99993	0.093	4
東一坊大路 西側溝心	$Y = -0.0057312X - 18902.02$	0.99972	0.154	5
東一坊坊間東小路 東側溝心	$Y = -0.0041437X - 18788.31$	0.99971	0.125	3
東一坊坊間東小路 道路心	$Y = -0.0042848X - 18812.38$	—	—	2
東一坊坊間東小路 西側溝心	$Y = -0.0045526X - 18855.20$	0.99955	0.183	3
三条条間南小路 北側溝心	$(X = -0.0016688Y - 146443.35)$	—	—	2
三条条間南小路 道路心	$(X = -0.0008561Y - 146432.28)$	—	—	2
三条条間南小路 南側溝心	$(X = 0.0012800Y - 146395.78)$	0.87805	1.055	6
三条条間南小路 南側溝心*	$X = 0.0026722Y - 146372.47$	0.99102	0.276	5

* 点33を除いた場合 () は問題を含むもの

東一坊大路 平城宮東南入隅に開く小子門へ通じる大路である。東西両側溝心・路心ともに直線性がよく、高い相関係数が得られる。平城京の条坊は、平面直角座標系（国土座標系）に対して北で西偏するが、東一坊大路の場合、その偏角は、 $17' 52''$ （東側溝心）～ $19' 42''$ （西側溝心）である。ここでは、路心の偏角である $18' 44''$ を、条坊計画線の偏角としよう。道路幅については、左京七条一坊の第252次調査で、22.3mというデータを得ている。しかし、西側溝が非常に大きく、溝岸が流水によって侵食されているため、正確な幅は確定しがたい。平城宮小子門の南側で実施した第39次調査で得た23.6mを、本来の側溝心々間距離と考えておく。

この値は、すでに指摘されているように、80尺（以下、たんに尺という場合は、大宝令小尺をさす）と復元するほかはない。しかし、東一坊大路の設定を、和銅六年（713）の度量衡改定以降とみる必要はないと思う。というのは、小子門の遺構の再検討によれば、門の平面は、従来の推定より小さく、桁行総長65尺と確定できる⁽³⁾。この小子門基壇の両側の溝が、そのまま東一坊大路の両側溝であり、門心と東一坊大路心（条坊計画線）は一致する。平城宮の建築が、小尺を使用したことは疑いないが、東一坊大路の場合は、小子門平面との密接な関連から、設定にあたって小尺を使用した、と考えられるのである。したがって、東一坊大路の設定年代を、ことさら下降させる必要はない。和銅遷都当初からの設定とみてよいであろう。

東一坊坊間東小路 本書所載の第46次調査で東側溝を検出しているほか、路心・両側溝心のデータがある。やはり直線性がよく、高い相関係数が得られる。国土座標系に対する偏角は、東一坊大路よりもやや小さく、 $14' 15''$ （東側溝心）～ $15' 39''$ （西側溝心）である。路心偏角 $14' 44''$ を、条坊計画線の偏角とする。道路幅については、左京三条一坊の第230次調査により、側溝心々間で7.1m、左京六条一坊の奈良市第139次調査では、同じく6.5mの値を得ている。前者は、正しく20大尺（24尺）に相当するが、後者は、大尺・小尺ともに完好な数値とならない。ここでは、平城宮および今回の調査地に近い前者の数値を、本来の道路幅と考えておく。

三条条間南小路 路心・両側溝の検出例がある。原データでは、北側溝心と路心が国土座標系に対して、逆に西で北偏した数値を示す。しかし、資料数の多い南側溝心のデータを検討すると、左京の点28～32がほぼ一直線に並ぶのに対して、右京三条三坊の第162次調査の点33だけが、一つだけ大きく北へずれる。つまり、点28～32と点33は同一直線にはのらず、条坊計画線との位置関係が、両者で異なることは明らかである。これは、Tab.11に示すように、相関係数と標準誤

Tab.12 条坊計画線の方程式の推定

条 坊	方 程 式	備 考
東一坊大路	$Y = -0.0054517 X - 18849.48$	道路心の方程式
東一坊坊間東小路	$Y = -0.0042848 X - 18812.38$	道路心の方程式
三条条間路	$X = 0.0026722 Y - 146235.08$	点22と三条条間南小路の傾きから
三条条間南小路	$X = 0.0026722 Y - 146368.92$	点33を除く南側溝心の式を3.55m北へ

差にも端的に表れている。つまり、点33を含む場合の南側溝心の回帰式は、相関係数が低く、標準誤差も大きい。それに対して、点33を除いた場合は、相関係数が高い数値を示し、標準誤差も格段に縮小する。そこで、点33以外のデータから求めた回帰式を、南側溝心の方程式と定めることとする。この直線は、国土座標系に対して、9' 11" 西で南偏する。

道路幅については、左京三条二坊の第174-10次調査により、側溝心々間 7.1m、右京三条三坊の第162次調査で、同じく 10.1m というデータを得ている。前者は、正しく 20大尺 (24尺) に相当するが、後者は、大尺と小尺のいずれによっても、完数とはならない。やはり、今回の調査地に近い前者の数値を、本来の道路幅とみておく。そして、南側溝心の北 3.55m (10大尺=12尺) の位置に、路心を想定することにしよう。後述するが、この路心は、三条条間路との関係からみて、条坊計画線と一致すると考えてよい。次に、こうして得た路心の方程式に、先述の第162次調査地の Y 座標を代入すると、そこでの条坊計画線の推定座標は、(X = -146,421.93、Y = -19,837.00) となる。この数値は、点27の路心と 6.6m くいちがっており、むしろ点33の南側溝心に近い。したがって、第162次調査の成果に立脚する限り、ここでの三条条間南小路の設定は、条坊計画線を中心としてではなく、北へずらしたかたちで行われたと考えざるをえない。

三条条間路 大半が、現在の通称「大宮通り」の路面下となっており、右京三条三坊で路心と両側溝の検出例があるにとどまる。ここでの道路幅は 8.82m と報告されており、25大尺 (30尺) と復元することができる。国土座標に対する偏角は、発掘調査からは明らかでない。そこで、三条条間南小路の推定偏角である 9' 11" を、便宜上、三条条間路の偏角とすることにしよう。そして、奈良市第236-2次調査で得た路心座標を通る直線を、条坊計画線と想定しておきたい。

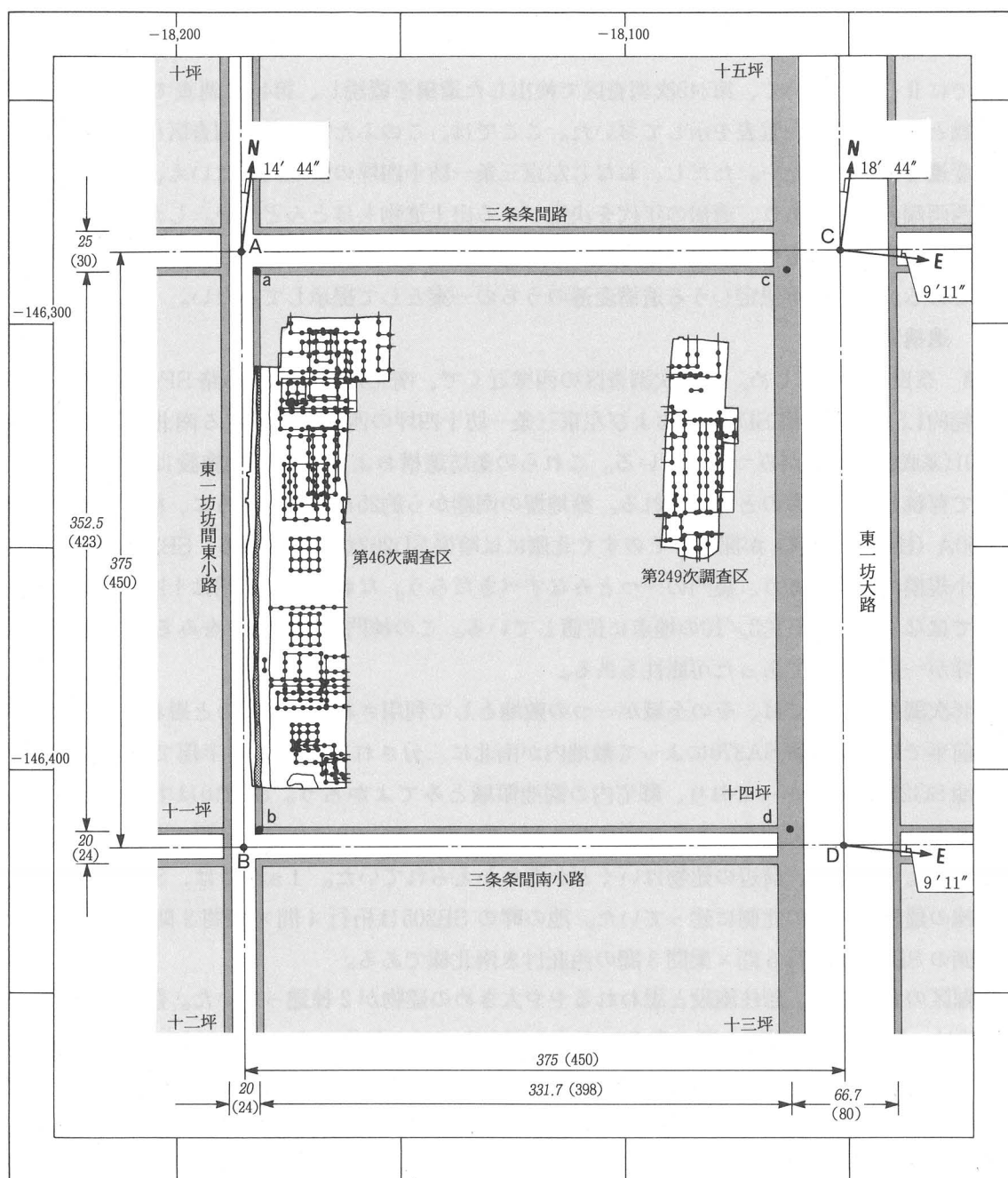
なお、この直線を、左京三条一坊十四坪まで延伸し、三条条間南小路の推定条坊計画線との間隔を求めると、133.8m という数値を得ることができる。これは、375大尺 (450尺) とみて誤りない数値であり、この二本の道路に関する、上記の推定の妥当性を裏づけるものとみられる。

左京三条一坊十四坪の四至 以上の作業から推定した、条坊計画線の方程式を、Tab.12に示す。この四本の直線の交点 A～D が、左京三条一坊十四坪の四至である (Fig.22)。それによると、十四坪の辺長 (条坊計画線間) は、北辺 (A-C) が 133.6m、残りの各辺が 133.8m と、ほとんど一致した数値を示す。また別に、各道路の、当該坪側の側溝心の方程式を求め、その交点を a～d とする。それぞれの間隔が、対辺側溝心々間距離であるが、この場合、北辺 (a-c) は 118.5m、南辺 (b-d) が 118.7m、東辺 (c-d) と西辺 (a-b) は 125.9m となる。

(1) 井上和人「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1985年、pp. 1-102。

(2) 新井宏『まぼろしの古代尺-高麗尺はなかった-』1992年。

(3) 小沢毅「平城宮小子門の再検討」『奈良国立文化財研究所年報1994』1994年、pp. 66-67。



	X	Y		X	Y
A	-146,283.68	-18,185.58	C	-146,283.32	-18,051.99
B	-146,417.51	-18,185.01	D	-146,417.16	-18,051.26
a	-146,288.08	-18,182.14	c	-146,287.76	-18,063.62
b	-146,413.95	-18,181.61	d	-146,413.64	-18,062.89

Fig. 22 左京三条一坊十四坪四周の条坊復元 単位尺 (斜体は大尺) 1:1500

2 左京三条一坊十四坪の遺構変遷

すでにⅡ-2において、第249次調査区で検出した遺構を概説し、第46次調査で出土した掘立柱建物と掘立柱塀の一覧表を示しておいた。ここでは、このふたつの発掘調査区における主要遺構の変遷を考えてみたい。ただし、おなじ左京三条一坊十四坪の敷地内とはいえ、両地区は、その東西両端の位置にあり、遺構の年代を決定づける出土遺物もほとんどない。したがって、以下に示す遺構変遷は、遺構の重複関係や柱筋のそろいかたなどの、ごく限定されたデータに基づくものである。いくつか想定しうる遺構変遷のうち一案として提示してみたい。

A 遺構変遷

I a 期 奈良時代のはじめ。第46次調査区の西壁近くで、南北方向の坪境小路 SF400の東路肩部分、幅約1.5mの東側溝 SD385、および左京三条一坊十四坪の西側を区画する南北方向の築地塀 SA201(基底幅約2m)がみついている。これらの条坊遺構および敷地区画施設は、奈良時代を通じて存続していたものと考えられる。築地塀の南端から約25m北のところに、桁行1間の棟門 SB250A(柱間寸法7尺)が開き、そのすぐ北側には暗渠 SD262が東西に通る。SB250Aは1間のみの小規模の棟門であり、裏門の一つとみなすべきだろう。なお、この棟門は十四坪西面の中央付近ではなく、南から約3/10の地点に位置している。この棟門位置の偏りをみると、十四坪と十三坪が一連の敷地であった可能性もある。

第46次調査の結果では、その全域が一つの敷地として利用されていたものと思われるが、奈良時代前半では、東西塀 SA270によって敷地内が南北に二分されていた。南半部では、調査区南端で池 SG210がみつかり、邸宅内の園池領域とみてよかろう。SG210は中島をとまなう曲池であり、発掘区南端からさらに南にひろがっている。SG210はかなり長期にわたり存続したものと考えられるが、周辺の建物はいくらか造りかえられていた。I a期には、SB205とSB245の2棟の建物が、池の北側に建っていた。池の畔のSB205は桁行4間×梁間2間の東西棟、その北側のSB245は桁行5間×梁間3間の西庇付き南北棟である。

発掘区の北半には、居住施設と思われるやや大きめの建物が2棟建っていた。敷地北端に近いSB370は、桁行6間×梁間2間の身舎に南北2面庇をつけた建物である。ただし、北庇は中央の2間のみとする。南側柱列の西端から3つめまでの柱穴にいずれも柱根(径28~35cm)が残っており、そのうちの1つの柱根は、年輪年代測定によると、伐採年代の上限は680年代を示している。一方、南側のSB300は東西二面庇をもつ桁行5間×梁間4間の南北棟である。

十四坪東端の第249次調査区では、この時期に相当する建築遺構がみつからない。発掘区中央東寄りのところに、2間以上の東西塀 SA5669と2間の南北塀 SA5668が建っていたにすぎないから、この区域の性格についてはよくわからない。

I b 期 第46次調査区の園池領域のみ変化する。東西塀 SA270の南側で、SB205は南東のSB204に、SB245は東寄りのSB235に建て替えられるのである。池の畔に建つSB204は、梁間2間以上×桁行1間以上と推定され、床束の痕跡と思われる柱穴が残っており、おそらく床張りの東西棟であったと考えられる。北側のSB235は梁間4間×桁行2間以上、南北二面庇付きの大きな東西棟である。

Ⅱ a 期 奈良時代前半の中頃。敷地を南北に画していた東西塀 SA270が撤去され、その17.5m南

に新たな区画施設として、東西塀 SA241がもうけられる。SA241の北側には、3間×3間の総柱式高床倉庫 SB260・SB280が2棟建設される。SB260とSB280はまったく同一の規模で、しかも南北方向の柱筋をそろえている。平面は、総長が東西6.4m(柱間寸法7尺等間)×南北7.2m(同8尺等間)で、やや南北に長い。柱掘形は1辺が120~140cmと大きく、さらに、SB280南側柱列の東から2つめの柱穴に直径55cmの柱根が残っていた(年輪年代測定では659年)。径55cmというスケールは、第46次および第249次調査区で出土した柱根のなかでは最大であり、この倉庫群の重要性を示唆するものといえよう。さらにSB280の北方には、2間×2間の高床倉庫 SB360(柱間寸法7尺等間・正方形平面)も造られていた。SB360も総柱式だが、東側の中央柱を省略している。SB360は8間の南北塀 SA330で東側の領域と画されており、SA330の北東には、梁間2間×桁行4間の小振りな南北棟 SB361も建っていた。このようにⅡa期においては、東西塀 SA241の北側に3棟の総柱式高床倉庫が集中配置され、それらはSA241のほか、南北塀 SA330によって周辺の領域と区画されていたのである。

一方、南側の園池地区では、東西塀の南下によって、SG210を中心とする園池の領域は、おおはばに狭くなった。また、SA241の建設にともなってSB235は廃絶し、3間×3間の総柱式床張り建物 SB220が建ち、SB204も梁間2間×桁行1間以上の東西棟 SB202に建て替えられた。

東側の第249次調査区では、大型の南北棟が2棟建設される。1棟は発掘区のほぼ中央に位置するSB5631、もう1棟はその南にほぼ柱筋をそろえて建つSB5637である。このうちSB5631は、梁間3間×桁行7間の東庇付き南北棟で、北側の4間を「堂」的な広間、南側3間を3つの「室」に区分する特殊な平面をもつ。しかも、西側の3間の南北塀 SA5635とも柱筋をそろえており、

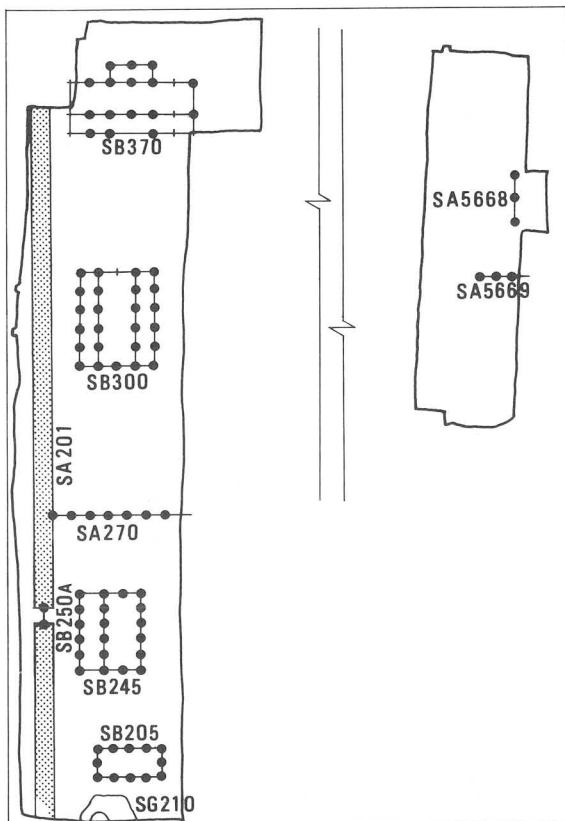


Fig.23 I a期の遺構

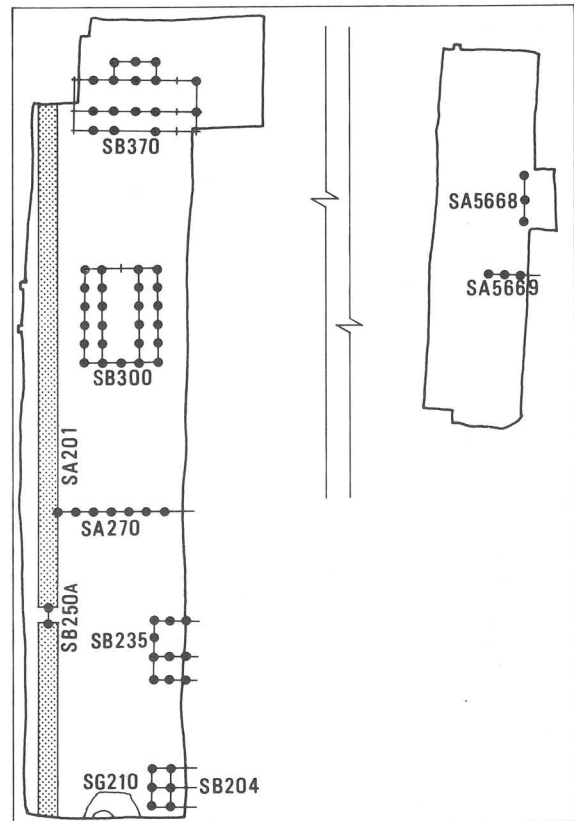


Fig.24 I b期の遺構

南側3間の「室」部分のみ、西庇をともなった可能性がある。一方、SB5637は北端のみ検出したにすぎず、規模・平面は未確定だが、西庇付きの南北棟である可能性が大きいと思われる。この2棟の南北棟は、東西塀SA5641で北側の領域と画されていた。また、SA5641には南北塀SA5642が接続していた。

Ⅱb期 奈良時代前半の終わり頃。Ⅱa期から変化するのは、第46次調査区の北半のみである。SB280の北側では、小型の倉庫SB360が取り壊され、居住関係施設と思われる4棟の大型建物が建設される。4棟のうち、規模が確定しているのは南側の2棟で、SB310は梁間3間×桁行6間の東庇付き南北棟、その北側のSB350は梁間3間×桁行7間の南庇付き東西棟である。さらに北側のSB390は、梁間1間以上×桁行6間の東西棟、東端のSB380は梁間2間×桁行1間以上の東西棟である。以上のように、第46次調査地区は、Ⅰ期からⅡ期にかけて大きく変化をとげる。Ⅰ期では東西塀SA270によって敷地を南北に二分されていたが、Ⅱ期になると、区画施設である東西塀が南に移って園池領域がせまくなり、塀の北方に、まず3棟の高床倉庫が配置されるが、最終的には、中央区の双び倉の北方に居住関係施設が建設され、敷地を南・中・北の3地区にわけける用途分担がなされるようになる。

ところで、いまのべたように、Ⅱb期になると、第46次北区において居住関係施設が充実していくのだが、それらの建物個々の規模は、第249次調査区で出土したSB5631におよばない。SB5631がⅡ期を通じてもっとも大きな建物なのである。したがって、左京三条一坊十四坪全体では、中央部分が未発掘ではあるが、敷地の中枢機能が、どちらかといえば、東寄りにおかれていた可能性が大きだろう。

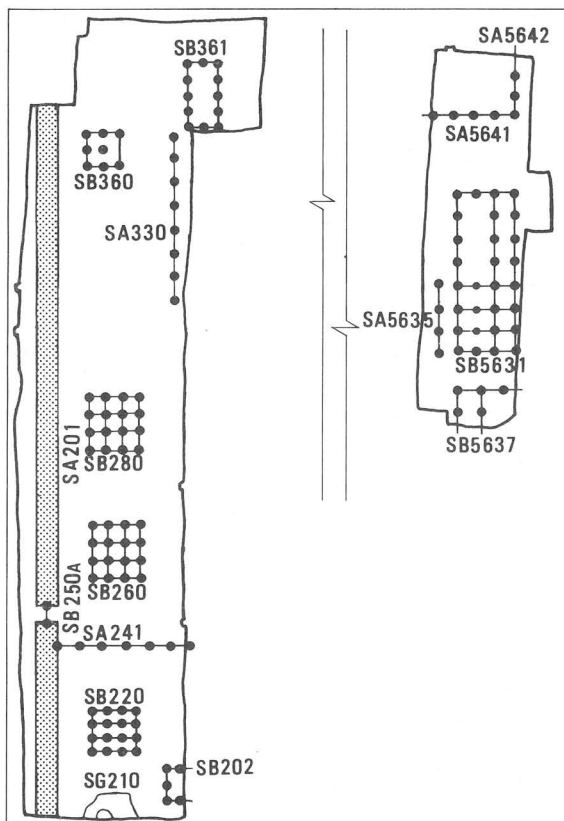


Fig.25 Ⅱa期の遺構

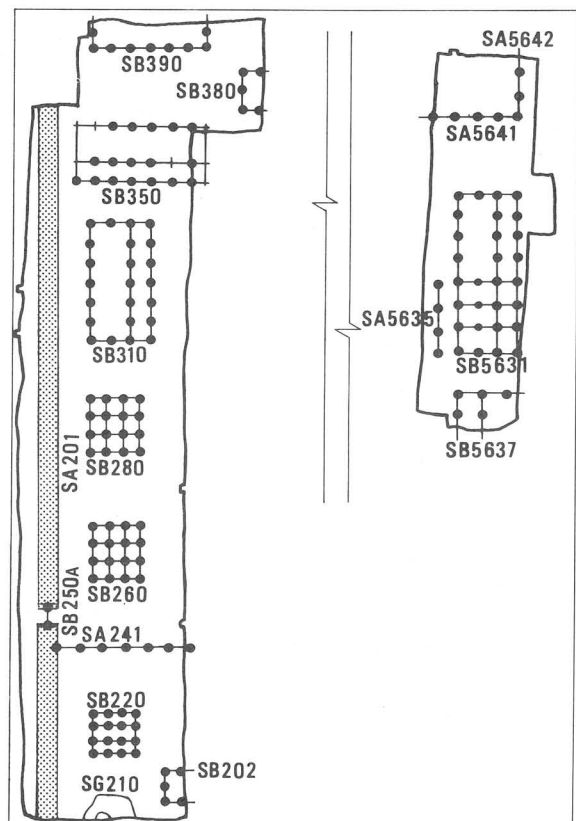


Fig.26 Ⅱb期の遺構

Ⅲ期 奈良時代後半。第46次調査区では、恭仁京その他への遷都のあいだも、双び倉 SB260・280 および池 SG210は存続していたものと考えられる。しかし、西面築地塀をぬける棟門が建て替えられる。すなわち、柱間寸法7尺のSB250Aが、同11尺のSB250Bに変わるのである。他の建物・塀はすべて撤去され、還都後、新しい建物が造られた。第249次調査区ではSB5630、SB5632、SB5638、SB5640、SB5663、SB5665の7つの建物がこの時期に属す。このうち、正殿クラスの建物と思われるのがSB5632である。SB5632は南北にならぶ5つの柱穴が発掘区西壁沿いで検出されたにすぎないが、柱根の径は大きく、南北二面庇付き東西棟と推定される。SB5632の東側に建つ梁間3間×桁行7間の東庇付き南北棟SB5630とその南側のSB5638が脇殿風の建物である。SB5630の柱抜き穴からは、奈良時代終わり頃の土器(平城宮土器編年Ⅴ期)が出土している。Ⅱ期のSB5637の柱穴を覆う土坑SK5660の埋土からは、奈良時代中頃から後半の土器(平城宮土器編年Ⅲ～Ⅳ期)が出土している。また、SB5632の南側に建つ小振りのSB5665は、SB5632の前殿とみなされる。SB5632の北東には、一間門SB5663が建っていた。痕跡は残っていないが、この門の左右にはおそらく低い築地塀が通っていて、敷地を南北に区画していたものと思われる。その北側には、東庇付きの南北棟SB5640をもうけていた。

一方、西側の第46次調査区では、Ⅱb期とおなじく、南・中・北の3つの領域に分ける敷地利用がなされていた。ただ、Ⅱb期において南の園池と中央の倉庫群を区画していた東西塀SA241は、少し北側の東西塀SA240に建て替えられている。SA240の南側には、梁間2間×桁行6間の東西棟SB230を置き、池SG210の北東の畔には、梁間2間×桁行2間以上の東西棟SB203を新たに建設している。中央区的双び倉はⅡ期以来の姿をとどめているが、北区では柱筋をそろえ

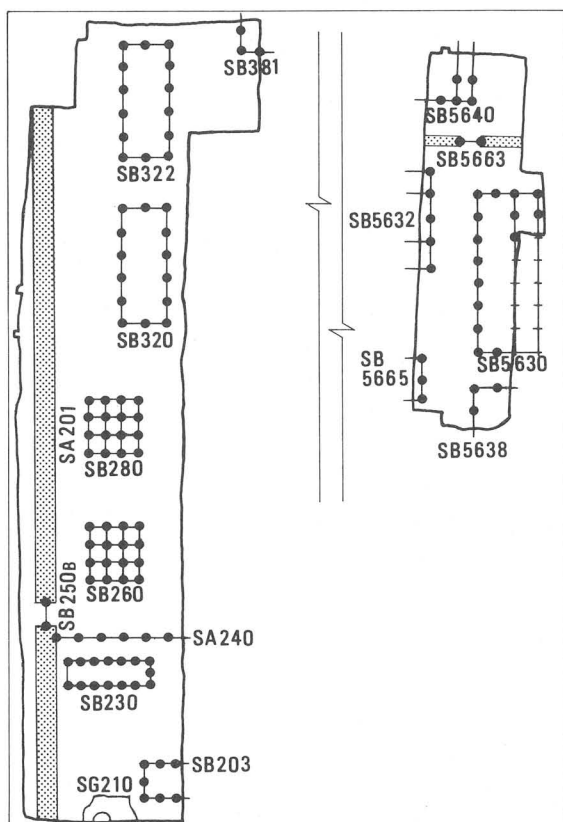


Fig. 27 Ⅲ期の遺構

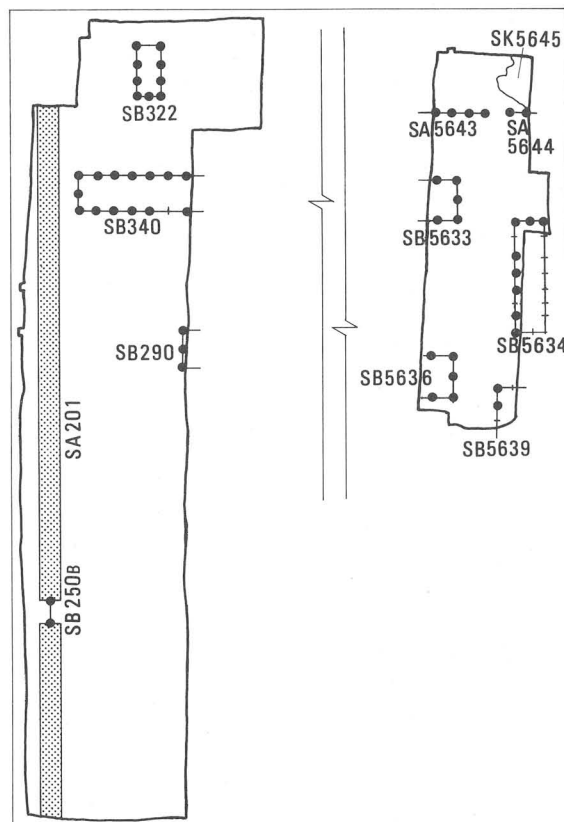


Fig. 28 Ⅳ期の遺構

た梁間2間×桁行5間の南北棟(SB320・SB322)が2棟ならび、さらに発掘区北東隅にも1間以上×1間以上の建物SB381が建っていた。

ここでふたたび第46次調査区と第249次調査区の建物規模を比較すると、Ⅱ期と同じく、東側にあたる第249次調査区のSB5630が、西側の第46次調査区でみつかったどの建物よりも大きいことがわかる。しかも、SB5630は脇殿相当の建物で、正殿と推定されるSB5632は規模が未確定ながら、南北二面庇付きのさらに大きな建築であったろう。したがって、Ⅲ期の場合、中枢施設が十四坪の敷地東寄りにあった可能性は、Ⅱ期以上に高いといえよう。

Ⅳ期 奈良時代末期～平安時代初頭。園池地区および双び倉は廃絶する。ふたたび大きな建て替えが進むが、新たに建設された建物は、いずれも規模が小さくなっている。第249次調査区ではSB5633、SB5634、SB5636の3棟が中庭を囲むかのように配置される。SB5634は、梁間2間以上×桁行7間以上の南北棟、SB5633とSB5636はいずれも梁間2間×桁行1間以上の東西棟である。このような3棟の建物がコ字形にならぶ家屋配置は、Ⅲ期のSB5630、SB5632、SB5665の配列とも共通しているが、柱穴や平面の規模はⅢ期のほうがはるかに大きい。たとえば、おなじ桁行7間規模のSB5630(Ⅲ期)とSB5634(Ⅳ期)を比較すると、SB5630は桁行総長が20.7m(柱間寸法10尺等間)で、柱穴の1辺が100～120cmであるのに対し、SB5634は桁行総長が12.5m(柱間寸法6尺等間)、柱穴の1辺が50～70cmである。SB5633、SB5634、SB5636は、その敷地を東西塀SA5643およびSA5644で北側と画されている。SA5643とSA5644は柱筋を一致させており、この間を出入口とした可能性が大きい。SA5643とSA5644の北側には、金属鑄造関係の廃棄物を捨てた土坑SK5645があり、この一帯、もしくはその周辺に工房が存在していたことを示唆している。少なくとも、Ⅲ期までの住宅地的な遺構のありかたとはかなり異質な敷地の性格が看取できよう。なお、発掘区南東隅のSB5639もこの時期の建物と推定されるが、Ⅳ期の他の建物とくらべると、柱穴の規模は1辺80～100cmと、いくぶん大きくなっている。ただし、平面の全体規模は確定していない。

一方、西側の第46次調査区では、北区にSB290、SB322、SB340の3棟が建つ。もっとも北側のSB322は梁間2間×桁行3間の小振りな南北棟、中央のSB340は梁間2間×桁行6間以上の東西棟である。旧倉庫群地区に近いSB290は、発掘区東壁に3つの柱穴を検出したのみで、平面規模は不確定だが、梁間2間の東西棟と推定される。

Ⅳ期とみなされる遺構のうち、平面規模のもっとも大きな建物は、西側の第46次調査区で出土したSB340である。Ⅲ期までの最大規模の建物は、いずれも東側の第249次調査区で出土した遺構であったから、十四坪における中枢的施設の位置も、Ⅳ期になって大きく変化した可能性があるといえよう。なお、第46次調査区で出土した坪境小路近くの二、三の土坑を除くと、平安時代以降の遺物を出土する遺構はない。したがって、左京三条一坊十四坪の敷地は、長岡京遷都後、比較的早い時期に廃絶したものと考えられる。

B 敷地利用の特徴

以上の変遷案を、敷地利用という観点から整理しなおしておきたい。

まず、奈良時代のはじめ(Ⅰ期)では、東側の第249次調査区にほとんど遺構が認められないが、西側の第46次調査区では、東西塀SA270を境にして、北半を居住地区、南半を園池地区にわけていた。奈良時代前半の中頃(Ⅱa期)になると、第249次調査区に大型の脇殿風の建物が建てられ、

十四坪の敷地における中枢的な機能は東寄りにおかれていた可能性がある。一方、西側の第249次調査区では、東西堀 SA270が撤去され園池地区は狭くなり、東西堀 SA241の北側に2棟の大型倉庫 SB260・SB280と1棟の小型倉庫 SB360が建設される。ところが奈良時代前半の終わり頃(Ⅱb期)には、双び倉の北側がふたたび居住領域となり、比較的規模の大きい建物が数棟新築されるのである。第46次調査区における敷地利用のパターンを、ここまで再トレースすると、

Ⅰ 期：南＝園池 北＝居住施設

Ⅱ a 期：南＝園池 北＝倉庫群

Ⅱ b 期：南＝園池 中央＝倉庫群 北＝居住施設

というプロセスを確認できる。

奈良時代後半のⅢ期にはいると、再度大きな建て替えがおこなわれるものの、敷地利用のパターンは、Ⅱ b 期のスタイルをそのまま継承している。すなわち、十四坪の中心的機能は東寄りにあり、西側では「南＝園池／中央＝倉庫群／北＝居住施設」という用途分担が認められるのである。ところが、奈良時代の終わり頃(Ⅳ期)になると、敷地の様相が一変する。まず第一に指摘すべき重要な変化は、それまで中心的施設のあった東側の第249次調査区に大型の建物がみられなくなり、東寄りの地区は、むしろ金属鑄造の工房として機能していた可能性が大きいことだろう。一方、西側の第46次調査区では、双び倉や園池がいつまで存続したのか不明だが、北半には規模の小さな建物が3棟建っていたにすぎない。以上のように、Ⅲ期からⅣ期にいたる十四坪の敷地利用変化は、建物の小型化に象徴されるように、まず「衰退」の傾向を強く印象づけるが、それ以上に、用途そのものの転換を示唆するものでもある。それは、Ⅰ期からⅢ期までの敷地利用変遷が、一定の宅地内部での建て替えを反映するようにみえるのとは対照的であるといえよう。

3 結 語

調査地のある左京三条一坊は、北に二条大路、西に朱雀大路、東に東一坊大路、中央に東一坊間路が南北に通る、平城宮壬生門の正面に位置する。宮外官衙と考えられる遺構も検出されており、長屋王邸をはじめとする、貴族の宅地である左京三条二坊等とは、少し性格を異にする部分もあるようである。今回の調査は、平安京では、十四坪が神泉苑の一部であり、加えて、第46次調査で園池等が検出されていることもあって、その性格解明の手懸かりが得られるのではないかと期待された。

25年以上の間隔をおいて実施した第46次・249次調査は、それぞれ坪の西辺部と東北部の一画、面積にしてあわせて約3,000㎡、坪全体からみれば、わずかに20%強を調査したにすぎない。なおかつ、坪の中央部分ではなく、縁辺部の調査である。しかしながら、かなり遺構の密度の高い状況を窺うことができ、近接した坪の調査例と比較しても、ここが1町占地、さらには、第46次調査の坪西面築地に開く門の位置や園池の存在から、南の十三坪も合わせた2町占地の貴族の邸宅であった可能性も考えられる。

2次にわたる調査の成果としては、十四坪の西面築地とそれに開く棟門、掘立柱塀13条、総柱式高床倉庫を含む掘立柱建物37棟のほか、園池等を検出し、宅地利用状況の一端が明らかになったことと、土器埋納遺構から、ヒトの胎盤と銅刀子・墨挺・筆管を納めた胞衣壺が出土したことがあげられる。

遺構は、奈良時代では、大きく4時期の変遷をたどる。坪西辺地区では、初め掘立柱塀で敷地を園池と居住施設に区画し、Ⅱ期になって、倉庫群の一画がこれに加わる。特に、南北に並ぶ2棟の総柱式高床倉庫が、この地区の性格を考える上での手懸かりになるといえるであろう。これに対し、坪東北地区では、奈良時代当初は、遺構が希薄であるが、Ⅱ期になると、敷地を塀で区画し、その中に大型の掘立柱建物が出現する。こうした状況は、平城遷都後の奈良時代後半（Ⅲ期）になっても続いている。すなわち、恭仁宮への遷都をはさんだ前後の時期で、建て替えがあるとはいうものの、坪内における敷地利用形態が大きく変化することなく、基本的には、Ⅱ期の用途分担が踏襲されているのである。また、発掘調査を実施した限られた範囲ではあるが、Ⅱ・Ⅲ期における、十四坪の中核機能は、建物規模等からみて、東寄りにあった可能性が考えられよう。なお、坪東北地区において、Ⅲ期には、正殿・脇殿・前殿といった建物配置が想定されるが、これは、Ⅱ期の建物群を少し東に移したものとみることのできるであろう。奈良時代末には、敷地利用形態が大きく変化する。建物が小型化するとともに、鉾・埴輪・埴輪口等を投棄した土坑の存在から、敷地の一画に、金属鑄造関係の施設があったと考えられる。

土器埋納遺構は、2棟の南北棟SB5630・SB5638のちょうど中間に位置している。ただ、胞衣壺の身として用いられた須恵器壺が奈良時代前半のものであるのに対し、建物は奈良時代後半に建てられたものである。したがって、胞衣壺と2棟の建物の間に何らかの関係があるのか、あるいは偶然の結果なのかは、早急に結論を下すことはできない。

今回の調査においても、坪の性格を知りうるような直接的な資料は得られなかった。今後、未調査である坪の中心部分のみならず、周辺地区を含めた発掘調査が進めば、その性格が明らかになってくるであろう。